

外里富佐江 著

宮沢賢治の童話でまなぶココロの寄り添い方

川嶋みどり（日本赤十字看護大学名誉教授/健和会臨床看護学研究所所長）

デジタル社会到来で、人と人との関係や関心を持つ度合いが薄まる傾向を憂いつつある矢先、COVID-19のパンデミックにより、社会的距離を保ちながらのマスク越しのコミュニケーションが当然となってきた。だからこそ、人のココロに寄り添い、相手の思いを想像できることがいっそう求められている。そのような時期に「日常のありふれた生活の一コマに目を向けてそこからさまざまなことを感じてもらい、それを言葉にし、イメージしてもらうこと」という本書の意図に共感した。題材として宮沢賢治の2つの作品を選び、それぞれに課題を提示しながら、その場で感じた思いを表現するよう組み立てられ、子をもつ母親、保育園の職員、医療系の教職員らの補助教材として、また、作業療法士教育の授業補助教材として活用されることを期待したワークブックである。

まず、著者の勧めに従い、声を出して賢治独特の言い回しを楽しみながら読んでみた。第1話の「翁草」の実物は見たことがないが、濃いえんじ色のビロードのような筒状の花びらを通して、小さな蟻の目から見えるお日様の光の色を思い浮かべ、都会の窓からは見えない景色と遊んだひとときであった。第2話の「やまなし」は、遠い昔、中学生だった次男が幾度も幾度も読み返していたことを思い出しながら、賢治風の不思議な表現にしばし浸った。私は、目下在宅自粛の身で、誰ともしゃべらない日も珍しくない昨今であったので、いっそう楽しく感じられたひとときであった。

一方で、微かな疑問も湧いた。“他人とは目を合わせない”、“言葉を交わさない”ことを教え込まれている現代っ子たちが、この童話に接してどのような反応をするのだろうか。子どもだけではない。おそらく本書を活用する大人たちの多くは、高度経済成長後の至便さの行きわたった暮らしのなかで育ったことであろう。幼い頃の森や野原の思い出をたぐり寄せることができるのは、ごく限られているのではないだろうか。いずれにしても、その先の本書のメインである27の課題に進み、感じたこと、気づいたことを話し合うのはよいとして、進行役の「風の又三郎」と「カニ」の誘導でセンテンスごとに展開されるプロセスでは、共読者ならではの慎重さが求められると思った。

一方、いつの時代も子どもは子どもであり、大人は子どもの世界に入れないことを大前提に、個々人の個性を存分に発揮できるような使い方を工夫しながら活用すれば、大切な人の心に寄り添うための感性を育む一助になることは間違いないと思う。童話の読み方は人それぞれ、解釈も読む人のそのときの心のありように左右される。著者も述べているように「正解のない賢治の美しい世界」を、その時々感性の趣くままに受け止めて自分の言葉で語ることが、今だからこそ積極的に試みてはどうであろう。愛らしいイラストを見ながら童心に還り、楽しみながら共感力を高めることにもなると思う。

(B5 頁112 2020年 本体2,700円+税[ISBN978-4-908083-57-0] 株式会社シービーアール刊)